

エスノグラフィー

エスノグラフィーとは何か

- ◎ フィールドワークによって収集されたデータから立ち上げた自分の知見を、幅広い理論的視野の中に置き、解釈と仮説の導出過程を説得的に提示するテキスト

（箕浦康子『ふいーどワークの技法と実際』ミネルヴァ書房）

「エスノグラフィー」の3つの用法

- ◎ 第1
 - ・ フィールドワークの結果をまとめたテキスト
- ◎ 第2
 - ・ フィールドワークのプロセスそのもの
- ◎ 第3
 - ・ 民族誌学あるいは「記述民族学」をさす語

（佐藤郁哉『フィールドワーク：書を持って街に出よう』新曜社）

エスノグラフィーの構成

- ◎ 1 調査に際して抱いた疑問に関する記述あるいは調査目的・動機の記述
- ◎ 2 調査方法と実際の調査過程についての記述
- ◎ 3 調査の結果。観察を通じた知見とそれを支えるデータの記述
- ◎ 4 結果の考察と解釈

エスノグラフィーにおける記述のレベル

- ◎ 一般的レベル
エスノグラフィーが対象としている問題／集団の背景や理論上の位置づけ
- ◎ 中間レベル
フィールドワークが行われた場所や人々がコミットしている意味世界
- ◎ 具体レベル
フィールドノートに書かれている微細な活動の記述
 - ・ スブラドレー（Participant Observation, 1980）の6つのレベルを参考にしている。

文化を記述するという行為

- ◎ 80年代の文化人類学
 - ・ 構造機能主義的な枠組みにのっとり、対象社会を描写したもの。
 - ・ 例：スピンドラーの『ケーススタディー・シリーズ』では、共同体や部族の生活、環境、親族・婚姻、子供期、ジェンダー関係、政治経済組織、儀礼・宗教などの項目を埋める
- ◎ 客観的記述は可能か。という批判
 - ・ 他者を記述する作業には自己を装う作業を伴う。M. クリフオード（1984）
 - ・ マーガレット・ミードのサモア調査批判。フリーマン（マーガレットミードとサモア、1995）

エスノグラフィーの諸スタイル

- 人物中心の民族誌（構造機能主義に対する対抗）
 - 対象社会の個々のメンバーに注目し、描写される側の「論理」を優先し、＜彼ら＞の生きた感情や心理を描写
- 多声的方法
 - 「再構成された現実」という視点
 - 被調査者たちの解釈と調査者の解釈をつきあわせる

エスノグラフィーの文体

J. マーネン『フィールドワークの物語』

- 写実的物語
 - マリノフスキー「彼らを描写するのは、あるいは、彼らを創造するのはこの私だ」
 - 解釈の全能性
- 告白体の物語
 - 人格化された調査主体あるいは没落する権威
 - 種明かし、苦労話、不安や不一致の露呈
- 印象派の物語
 - 「これがこの世界だ。それをどう解釈するかはきみの自由だ」
 - 調査者の解釈抜きでの回想、断片化された知識と事実

エスノグラフィーの反省

J. マーネン（森川渉・訳）『フィールドワークの物語-エスノグラフィーの文章作法』現代書館、1999年

- エスノグラフィーにおける文学と科学の間の距離が縮小しつつあるということ。p7
- 良くも悪くも、この世界での正式な徒弟制的修行、そしておそらくは先輩に対するしかるべき尊敬の念、先輩が生み出した文化の再現装置が与えてくれる快適さが、私を含めて最近のエスノグラファーには欠けている。p10
- かつて「十分に良いエスノグラフィー」だったものが、多くの人にとってはやそれほど良いものに思えなくなっている。p8
- 私がフィールドワークをベースにして採集した素材は、多重回帰やカイニ乗検定などといった手続きから直接できあがってくる論文に磨きをかけ、固有の色を添えるために、ごく控え目に使われたにすぎなかった。p11
- （人類学と社会学）両分野ともに、密教的な理論・方法を奉ずる党派への徹底した分割化があまりに進んでいる。・・・ともに、一種の聖杯探求的なパラダイムを持っていると自負している。しかし、パラダイム神話は、ポスト・パラダイムのリアリティよりもゆっくりではあるが、確実に死ぬのである。p14

境界の喪失とエスノグラフィー

- 対象とする集団／社会は一定の境界で区切られているという前提 例：マリノフスキー
 - ↓ しかし
- 黒人アイデンティティ研究は、黒人文化という安定的な本質の様態が存在しないことを指摘。反本質主義（ゾラ・ハーストン）
 - ↓ つまり
- 移動・移住する人々が境界を破壊し、越境者の存在がエスノグラフィーの重要な要素となる（ハーストン）
 - ↓ そこで
- 意図的に＜他者＞を作り出す文化という装置。文化概念を使用せず、特殊ローカルな事象のエスノグラフィーを書く（アブ・ルゴッド）

カルチュラル・スタディーズとエスノグラフィー

- カルチュラル・スタディーズの観点
 - 文化や土着概念に対する構築主義的視点による批判。文化や歴史は構築されたもの
 - 解釈的アプローチ：「現実」は社会的に構築される。人間は、意味的に構造化された環境に生まれ、主体と他者との間で意味が創出される。
 - 「意味」は文化資源である。人は、自分に合うものを選んで、事故の意味空間を構築する。
- 実証主義（本質主義）との対立
 - 文化やアイデンティティの固定化を批判
 - 文化やアイデンティティは戦略的に選び取られるもの